

愛恵だより

第 5 号

2019 年 10 月 10 日発行

発行：公益財団法人 愛恵福祉支援財団
〒114-0015 東京都北区中里 2-6-1 愛恵ビル5F
電話：03-5961-9711(代) / FAX：03-5961-9712
<http://www.aikei-fukushi.org/>

「愛恵」の題字は初代理事長 三吉 保 氏による

不揃いな靴を履く人



公益財団法人 愛恵福祉支援財団
評議員 坂本 正路

街頭生活者に対する支援は様々な団体が多様な方法で行われていますが、私の属する教会、すなわち救世軍の小隊（教会）でも 2001 年の頃から、お金や食べ物を曜日に関係なく貰いに来る方のために、お金ではなく、おにぎりなどを差し上げるようになりました。

最初は数人でしたが、次第にその数が増えたため、月 2 回の日曜日の朝に限ってお渡しする様にして、2011 年には 120 名ほどの方になり、その頃はおにぎりだけでなく、五目御飯を作って差し上げていました。

その後、街頭生活者に対する支援の法律が出来た事により、その数は次第に減少していきました。現在は 70 名ほどの方が 2 週間に一度のコンビニのお弁当をもらいに来られます。その中にはもう 10 年も続けて来ている方もおられますが、お酒などが絶てない方、精神的な課題があるために今の生活に止まっている方など、単に法律だけでは解決しない複雑な問題があるのです。

来られる方の中には真夏であるにもかかわらず、衣類を何枚も重ねて着たうえによれよれの背広を着

ている方。廻りの方とは目を合わせず、目を閉じて静かに待っている方、お配りする時間には来られず、いつも遅れてくる方、多分他の方との接触を避けている方だと思うのです。

先日、最寄りの福祉事務所をお訪ねして、街頭生活者に対する施策についてお聞きしてきました。その姿勢は何とか街頭生活者を減らしたいという思いのあることを知りましたので、お弁当をお配りする際に、そのことを伝えましたところ、実際はそんなに簡単には相談に乗ってもらえないといい、その間には行政と街頭生活者の意識のギャップを感じました。

つい最近のお弁当配布の際の出来事ですが、コンビニ弁当と共に衣類などを差し上げていた際、一人の男性が靴が欲しいと言われるので、本人のサイズに合った靴をお渡ししたところ、脱がれた靴は左右の違う不揃いの靴を履いておられるのでした。揃った靴に履き替えて去っていく後ろ姿は足取りが軽くなったように感じられました。今後もささやかな活動ですが、街頭生活から離れることが出来ることを願いつつ続けていきたいと思います。

なお、この活動を見ておられる外部の方から、活動を支えるための寄付金もあり、この活動が続けられていることへの大きな励みになっています。

日本キリスト教社会事業同盟研修会に参加して

西 崎 攻 司(愛恵福祉支援財団理事)

2016 年春に教派を超えて持たれた宗教改革 500 年記念協議会の報告書が本年(2019 年 5 月)に刊行され、味読する機会を得た。その協議会の関心の一つにディアコニアの行為について論じられていた。招聘されたスイス・プロテスタント教会連盟ディアコニア部門のシモン・ホーフシュテッター氏が説教の中で次のように述べている。私たちは教会における「ディアコニア=奉仕」がどのような状態であるのか。そして教会の社会活動はどのような社会的かつ政治的な挑戦に向き合わなければならないのかを日本の聴衆に訴えたのである。スイスはもとより、欧州の総ての国は今日このこと、すなわち「難民」の問題に直面していると。しかしスイスでの様々な反応として、避難民は、多くの人々から恐れられている。よそ者であるがゆえに、不安と反発を招いている。また彼らは経済的な重荷とみられている。なぜならば寝食の世話と保護を受けねばならないからです。と

キリスト教会は今、この短期間にかくも多くの難民が自分たちの住む地域にいて、庇護を求めていることに対し、どのように向き合っていくのでしょうか。ディアコニア、すなわち援助を与える社会的な教会の活動はどんなことを担うことが出来るのでしょうか。

これらの課題は、国の政策ともかかわり重すぎますが、公益財団法人として、キリスト教精神に基づき、公益性を担保しつつ充実した企画、価値ある内容の「支援、助成、啓発」事業を進めている当財団として「ディアコニア=奉仕」の動向は関心事である。そのような折、下記の研修会に参加する機会に恵まれた。

神と隣人に仕える ―地域共生社会形成におけるキリスト教社会福祉の役割― をテーマとして、2019 年 6 月に浜松の聖隷クリストファー大学を会場として 2 日間の研修会が行われた。今大会の基調講演「コミュニティ形成とキリスト教社会福祉」の中で、横須賀基督教社会館長の岸川洋治氏は、様々な生活課題が噴出、顕在化してきている中で、キリスト教社会福祉が、制度に安住していないか。事業が内向きになり、そしてキリスト教主義が形式化していないかと。これからは、キリスト

教社会福祉施設と教会が協働してコミュニティ形成に取り組むべきであると提言されている。そのことによってボランティアの復権の機会となると、大会テーマの実践へとつながられた。次のシンポジウムにおいて、地域に根差したセツルメント的原点に立ち返ることとその発想が大切であると強調された。(野原健治興望館長)。教会と協働のわざとして、隣人愛の源泉としての保育事業を(松戸教会村上恵理也牧師)。キリスト教・教会とキリスト教福祉の特質、基本的な考え方として横軸 ①共感②連帯③ Capacity building ④ Check and evaluation 縦軸 ⑤ Christ (キリストは、苦しむ人間の姿に駆け寄り、寄り添い、その痛みを取り去ろうとされた。そこにキリスト教信仰を持つ者の確信がある。) この教えを縦軸に実践してほしいとルーテル学院大学学長の市川一宏氏がまとめられた。コーディネーターの金城学院大学柴田譲治教授の進行で今日抱えている①「隣人に仕える」キリスト教福祉の取組②キリスト教福祉としての地域社会とのかかわり③「神に仕える」キリスト教会のミッションとキリスト教福祉との関係をどうしていくのかというこの鼎談をまとめられた。二日目は、社会福祉学会の研究発表が部門別に行われた。

本大会は理論と実践を繋げる契機になった。日本キリスト教社会福祉学会第 60 回大会と日本キリスト教社会事業同盟第 75 回総会・研修会の二つの側面を生かした共同開催になったからである。関係者のご苦労は大変であったことでしょう。会場の「ディアコニア」の原点がそこかしこに息づいている三方ヶ原の「聖隷」の地は参加者をして心静まるまた鼓舞される地であった。



研修会風景

2018 年度 シンガポール研修で学んだこと

※ 2018 年度 第 19 回 シンガポール研修報告書より抜粋

児童養護施設 青葉学園 理事（保健師）
草 野 つ ぎ

シンガポールは、政策的に子どもの状況や課題に応じたサポートシステムが構築され、各機関の役割や機能が明確で、子どもの人権や安全安心を守り、子どもの健やかな成長のためにさまざまな取り組みがされていた。その中で、シンガポール子ども協会は、多民族、多文化国家の地域の子どもたちや親や家庭の問題などに対応しながら、各研究分析を検討し、多くの先進的な子どもへの教育プログラムを開発していた。実際に現場に出向きプログラムを実施、評価を行い、成果確認と実績報告をしながら政府や企業に活動をアピールし、資金を調達するという姿勢は、現場の子どもや家庭の問題を身近な問題として考えてもらえるよう企業や多分野団体への PR 効果もあり、大変参考になった。

シンガポール子ども協会の事業所は、国内に 12 か所あり、各地域の子どもやその家族をサポートし、地域福祉が定着していると感じた。また、幼児期から子ども自身に人権や道徳教育プログラムを実施するなど子どもの力を育む予防教育がされ、幼少期の子どもから理念をもって教育していくことの重要性を痛感した。

3 日目に見学したロータリーファミリーサービスセンターは、地域や団地内に住んでいる人々、子どもから高齢者や障がい者などすべての人々の総合相談窓口とサポートセンターや居場所の機能が合った。同じ地域に住む人々が、誰でも、いつでも、1 か所のセンターで対応できるシステムは、地域福祉活動で重要であり先進的であると感じた。現在、日本においては、子ども、高齢者、障がい者など関係法令が異なり、対象別に相談機関やサポート機関も異なるなど、利用しにくく、分かりにくい状況であり、今後、日本のめざすべき地域福祉活動の姿がそこにあると感じた。

シンガポールの子どもたちに関わるさまざまな取り組みと、各機関の理念や事業内容に触れ、スタッフの方々のエネルギーを感じることができ、有意義な研修をさせ



道徳、価値観教育

（社会に受け入れられる）

- 1) 共感の要因（正直、思いやり、責任、尊重）
- 2) 他人を受け容れる（誠実、親切、他人を考慮、感謝）の内容を絵本やカードなどでストーリーをつくり教育

ていただき、ありがとうございました。また、一緒に同行した皆様から、立場の違う業務や活動の実際を伺えたことは、私には宝物になりました。このように、多くの学びの機会をいただきました愛恵福祉支援財団に心より感謝いたします。

2019 年度 ペイン記念奨学金 受給者決定

本年度の同奨学金の受給者は次の通りです。

● 福岡県立大学院 2 年 JS さん

研究のテーマ 2016 年の改正福祉法によりすべての社会福祉法人の責務となった、地域における公益的な取り組み。

● 関西学院大学院 2 年 MH さん

研究のテーマ 難民学生のソーシャルサポートネットワークと社会統合「日本の大学に学ぶ難民への探索的インタビューによる分析」

● 関西学院大学院 2 年 KA さん

研究のテーマ 日本語が不自由で生活に困難を抱えている在留外国人保護者の生活のニーズを明らかにし地域行政への聞き取り調査と提言

● 立教大学院 2 年 MM さん

研究のテーマ 「ライフサイクルからみたメアリー・リッチモンドの生涯一ケースワークの理論家に及ぼした影響」

● 立教大学院 2 年 KH さん

研究のテーマ 日本における「格差社会」の問題点に焦点を当て日本の福祉国家の現在と今後の方向性について。日本の労働市場の構造変化の分析と意味するもの

● 関東学院大学院博士 3 年 HT さん

研究のテーマ 「里親家庭における養育者間の葛藤から見た里親支援」
一家庭でありながら社会的養護の担い手であり里子の持つ問題に葛藤や困難をどう乗り越えているかを調査し今後の里親支援の可能性を広げていくこと。

欲しかったミニ耕運機が助成されました～

NPO法人 手と手と手・スマイリハンズ

「公益財団法人 愛恵福祉支援財団」様からずっと欲しいと願っていた、ミニ耕運機をいただきました～。

当選確率やばくない？と、自分たちでも驚きつつ～。
無農薬、無肥料でお野菜などを育てたいよね～と言い出してから無料で畑を貸してくださる方がいて、自家採種で採った種を分けてくださる方がいて、自然の流れで農業ができることに。

しかし、機械類は一切無かったので、知人をお願いして耕してもらって。お手数をおかけしていたのですが、自分たちの耕運機があればな～と。

そのタイミングで我が、スマイリーハンズに来たミニ耕運機。

早速使い方を教えていただき、試運転。なかなかいい感じです！

これで、自分たちのタイミングで、やりたいところだけ耕すことができます。

いつもの事ながら、こうして困っている時に必要な時に必要な物を助成して下さることがどれだけありがたいことでしょう！！感謝しかありません！

